

東アジアにおける海賊・権力・社会 —1350年～1419年の日・中・韓を中心に—

ダミアン・プラダン*

今度のシンポジウムにいたり13世紀から16世紀にかけて東アジアの海域で活躍していたいわゆる「倭寇」、即ち日本から渡って大陸の海域を掠奪していた海賊に関して、私が2011年度パリのINALCO（国立東洋言語文化学院）で行ったこの「倭寇」と権力との関係についての修士論文研究の結果を元に発表した。

まず初めに「倭寇」という歴史用語について触れた。現代の歴史学においてはその概念に対してさまざまな捉え方がある。つまり、「日本の海賊」と言い換えられる捉え方、或いは「元寇」のように「倭」、即ち「日本人」による侵略という捉え方、「多民族的な海賊集団」という捉え方等が共存し、非常に曖昧模範な概念である。しかし「倭寇」の構成員について多少の議論があっても、現代の歴史学における「倭寇」という用語の使用自体は討論されていないようである。

現代歴史学では「前期倭寇」「後期倭寇」という時代的区分を付けている。前期は13世紀から15世紀にかけての二百年間、後期は16世紀の半ば頃に当たる。その二つの時期を隔てる百年ほどの長い期間に侵略に関する記述が史料上では殆ど見られない。16世紀半ばに再び発生した侵略に対し、その正体が前期倭寇と異なっているにも拘らず明朝側の記録では百年前の侵略と同様に「倭寇」という言葉で示されている。それらをふまえて、現代歴史学において「前期」と「後期」という区分を付けたとしても、そのまま使用すれば13世紀と16世紀に発生した出来事の原因とその形態の根本的な違いがわかりにくくなるのではないかと思

われる。また、「倭寇」という言葉が初めて史料の中で見出されるのは414年に建てられた『廣開土王陵碑』で、朝鮮半島で参戦している「倭国」の兵卒団体を指しているようである。そのことに関しては田中健夫氏が中世の倭寇と違ったものだと主張し、404年の「倭寇」を自身の研究から除外した¹。「前期倭寇」と「後期倭寇」に関しても同じような問題を提起できるのではないだろうか。大陸側の史料の中で同じ用語を使用しているからといって現代歴史学においてもその用語を何の検討や討論もなく再利用することに私は疑問を感じた。そのために、混同を招く「倭寇」という用語をあえて避け、他の語に置き換えることにした。

私の修士論文研究の対象となっている時期は1350年から1419年までのほぼ70年間に限られていたが、その期間でも海賊集団は著しい変化を見せる。単なる日本の海賊からだんだんと複雑な形を取ってゆき、組織として大きく複雑化してゆき、「海賊」から「商人」と化して東アジアの全海域を跨る経済網の中心的存在となっていく。その諸団体に対する日・韓・中の三国の権力者たちの姿勢や反応の比較研究を行った結果、その姿勢は主に三つの形態で現れた。これからその三つの形態に関して詳しく述べる。

まずは、海賊集団との連合・結託、或いは指揮する権力者の例を挙げ、その次に、海賊鎮圧に努めたそれぞれの権力者の対策例を比較する。

最後に海賊像の政治的工作、すなわちある権力者が政治的な目標を達成するために利用した、海賊たちが大陸で残した恐怖感等を扱う。これから、

* INALCO・パリ第四大学 院生

それら幾つかの例を挙げる。

1. 海賊集団との連合・結託、或いは指揮する権力者

まず、海賊集団に対する権力者の姿勢や態度に関して述べる前に、権力者たちとの関係性を明確にするため海賊の構成員に関して少し触れたい。1980年代後半に田中健夫氏は「前期倭寇」の構成員の中で日本人だけでなく、大陸出身、特に朝鮮半島出身の海賊団体が多かったという仮説を発表した。現代の韓国学界では朝鮮半島出身の個人が海賊の間にいたかも知れないがそれは海賊によって拉致されたいわゆる「被虜人」であり強制的に結びついていた人々だとして、田中氏の仮説が強く批判されている一方、日本側では倭寇は「多民族的集団」だったと主張されるようになった。私の考えでは、1350年代と1360年代には日本出身のみの海賊団体から14世紀末と15世紀初頭には少しずつ多民族的集団になっていくが、あくまでもその海賊が日本と深いかわりを持っていた。

1350年に高麗の南海岸を掠奪した団体があったが、これは1400年代に活躍していた集団と全く同じ組織形態・人員構成だとは考えられない。1350年に発生した侵略は南北朝の動乱が中央から九州に広がった時期と重なり、緊急事態に直面して兵糧米を高麗に求めるようになった地方権力者の指揮によって行われたと推測されている。その点において、韓国の歴史家である李領氏²は筑前国守護兼太宰府の少式であった少貳頼尚とその家臣であった対馬の宗経茂が海賊を朝鮮半島に派遣したと主張している。彼の仮説は現在でも批判されているが私は参考にすべき点が多いと考えられる。つまり1350年代に高麗に渡る西日本地域出身の団体は地方権力者に従っていた為「海賊」というよりもむしろ「水軍」に近いものだったのではないかということである。

南北朝時代の日本では「海賊衆」という集団が

存在していた。文字通りの「海賊」とは違い船舶を拿捕するよりも一部の海域を支配し、それを通過する船舶に通行料且つ保険料のようなものを課していた組織であり、南北朝両側の権力者によって地方勢力や水軍として雇用されていた³。

このことを踏まえ、1350年代における海賊集団は実に九州の権力者である少貳頼尚の水軍と朝鮮半島への海路に位置する対馬を支配していた宗経茂の水軍だったと言えよう。それは上述の海賊と権力者との連合・結託の例になる。日本列島の地方権力者—特に宗氏—と海賊との結びつきが1420年まで絶え間なく続くと言っても過言ではなかろう。海賊の活躍がもたらす経済的利潤が権力者の経済基盤となるばかりでなく、他の権力者との交渉手段にもなる。例えば宗貞茂が朝鮮王朝に交渉相手として優遇された理由は海賊に朝鮮半島の掠奪を禁じ、中国大陸の方に向かわせることができたからに他ならない。その代わりに朝鮮との貿易を許され、海賊が明国沿岸で掠めた貨物を朝鮮で売るシステムを1400年代と1410年代に生み出した。それを裏付けるためには幾つかの史料があり⁴、また1418年の宗貞茂の死後間もなく朝鮮半島での侵略が再現した事実を挙げることができる。このような貿易を中心とした海賊が1350年代の水軍様態の海賊といかに異なるかは明白だろう。

海賊と権力者の関わりの例は中国側の史料上でも確認できる。1350年代に元朝に対する反乱が勢いをあげて広がり、中国全土で自治的な団体が現れる。日本商人の行き先であった慶元、即ち寧波を元軍から奪回し1367年まで直接に統轄していたその一つの自治団体がその時から日本海賊と交流していたと思われる。その団体はのちに洪武帝として即位した朱元璋によって1367年に破られたが、『明史』の中にその船団の残党が遅くとも1370年まで日本の海賊と結託し続いたと記されている⁵。

2. 海賊鎮圧を努める権力者

海賊と結託した権力者が存在した反面、海賊の被害を受けたり、敵の経済基盤破壊のため、海賊の取り締まりに努める権力者も現れる。それは概ね中央権力に当たるが、当時、日・韓・中の三国が内乱の状態にあったので、そのような状況の中で海賊の禁圧や統制は難しくなる。日本では南北朝の動乱が繰り返される中で、室町幕府は敵軍の経済基盤かつ水軍となる海賊を取り締まる動きを見せている。將軍足利義満が1370年に家臣の今川了俊を九州探題として博多に派遣し、南朝勢の征伐と海賊の鎮圧するように命じたが、この二つの目的がもとより無関係ではなかった。將軍は当時九州での南朝勢の代表者であった懐良親王とその家臣だった少貳頼尚が海賊と手を結んでいたのを知っていたはずである。ところが、今川了俊が海賊の鎮圧活動を「松浦党」のような「海賊衆」に委ねた点において皮肉を感じざるを得ない。今川了俊がそうせざるを得なかった理由は上述のように当時「海賊衆」が水軍として使用されることが珍しくなかったことにある。しかしながら、それが中央の権限が殆ど届かなかった地域で活躍していた海賊を統制する唯一の方法だったと言えよう。

日本以外の中国大陸・朝鮮半島ではそれぞれの国なりの鎮圧方法が採用され、それらを分析することで各国の特別な経緯を読み取ることができる。

高麗王朝も海岸を荒らし回る海賊の鎮圧に尽力したが、全階層の民衆を動員しようとしたところ、その動員に対抗していた賤民の動乱に遭った。高麗末期の社会に「禾尺」という賤民団体が存在し、1382年と1383年の2回にわたり日本人を装って内乱を起こしたと『高麗史』にある⁶。田中健夫氏ら日本の歴史家はそれを高麗人が日本の海賊と結託していた証拠として取り上げてきたが、その事件の起源を1378年に高麗王朝にて採用された「防倭」対策に求める必要があると思われる。つ

まり、日本人と結託していたというよりも、無理やり「防倭」に動員されそうになったこの賤民たちはそれを避けるために内乱を起こしたと考えた方が自然なように思われる⁷。

しかし賤民ばかりでなく、日本から渡ってきた海賊に対して戦ったため自身の声名が国内に広がっていた朝廷の武臣も王権を動揺させ、その武将の一人である李成桂が1392年にクーデターを通し王位にまで登り朝鮮王国を建国した。朝鮮が成立してから、新たな政策が採られ、相変わらず海賊を厳しく鎮圧しながら朝鮮半島で貿易と日本人の移住を許すことにしたのである。その為、多くの海賊が商人に転身し、とうとう1410年代には海賊行為の頻度が下がるようになった。

中国大陸では、内乱弾圧の為に多忙を極めていた元朝に国内と国外の海賊問題の両方に対応する余裕はなく、日本の海賊が中国沿岸地域で活躍するはずが、『元史』の中でそれに関する記事が殆ど見られない。1358年に元軍が海賊と戦って打ち破ったと記されているくらいであるが、内乱のために地方の正確な情報が朝廷まで伝達されていなかったため、そのほかに海賊による掠奪がなかったかどうかは断定できない。確実に言えるのは明朝が成立する1368年に日本の海賊集団が中国沿岸地域で活躍していたということである。先ほど申し上げたように地方権力と手を結んでいた可能性が大きい。明朝はこの問題に着目し、それを取り締まるべく、「海禁」という対策を採った。つまり海賊鎮圧の名目で一切の私的出帆を禁止したのである。

この明国内での海賊の頭と言われていた方国珍と張士誠が朱元璋、即ち洪武帝のライバルであったことも注目すべき点である。それを考慮に入れば海賊鎮圧は政治的な目標を達成するための活動だったと言えるのではないだろうか。

3. 政治的工作のために海賊像を扱う権力者

最後に東アジア諸国における「倭寇像を用いた政治的工作」と言える歴史現象について触れたい。すなわち、権力者たちが、海賊討伐の名目を国内外で利益追求に利用した現象である。

日本国内では大内義弘の興味深い例がある。南北朝の動乱がほぼ終息した1390年代、最後の問題として残されたのは九州での南朝勢であった。足利義満が九州の反乱を抑えるため大内義弘を派遣し、まもなく大内が南朝勢を打ち破り九州を支配下に置いた。しかし、そうすることで足利義満から以前から危険視されていた大内義弘は貿易のため大陸と強い繋がりを持ち完全に大陸貿易の拡大を狙う将軍のライバルになってしまった。1399年に応永の乱で足利・大内両軍が戦った結果、大内義弘は戦死する。

この応永の乱の前、将軍との衝突が不可避になった頃、大内が朝鮮に使節を遣わし海賊に対して戦い全滅させたという名目で朝鮮での領地を求めた⁸。それは将軍に敗北した場合に逃亡先を確保するためだったと考えられ、その目標を達成する為には南朝勢に対して収めた勝利を海賊討伐の結果と装ったのである。これはまさに海賊像を利用した政治工作といえよう。

しかし、海賊像を政治目的で取り扱うのは日本の権力者のみではない。高麗・朝鮮側でも幾つかの例が見られる。すでに述べた李成桂という高麗王朝の名臣は1392年にその王朝を転覆させて自ら即位し朝鮮を建国した人物である。彼は元来地位の低い武臣だったため、普通なら王として即位することは不可能だったろう。しかし日本から渡ってきた海賊に対して戦い、その度に勝利を納めたと『高麗史』で語られている。日本海賊に対して得た勝利を、自身の名声を高めて民心を掴むための宣伝に利用したのではないかというのが私の持論である。2回も起きる高麗と朝鮮による対馬侵略も政治的工作の例としても上げることができる。1389年と1419年に、各王朝が海賊の巢窟と言われていた対馬に征伐軍を派遣し、そこで船舶

と住宅を焼き払い、海賊によって誘拐された被虜人を連れて還った。海賊にとっては、一回目の征伐が大した打撃であったとは言いがたいが、その目標は海賊鎮圧の他にもあったと私は考える。まず、両方の遠征が王の即位からわずか一年後であることが単なる偶然だと考えられない。1388年に李成桂がクーデターを通して政権を握ったにも拘らず自ら王位に就くのに支障があり、代わりに傀儡王を据えて自ら王国を統轄するようになった。1389年の対馬征伐は前代の王と違い「防倭」に全力を尽くすように見せ、人民の庇護者としての名声を高め、自らの1392年の即位への必須段階と見てよかろうと思われる。

1419年の対馬征伐にも同様の背景があると思われる。現代の韓国でも高く評価されている世宗王が1418年に21歳で第四朝鮮王として即位する。彼は第三朝鮮王太宗王の三男だったのにも拘わらず父に選ばれ王位に就いたのであるが、当初の彼は困難な立場にあった。若い王は自分の権威の正当性を主張する必要があった。つまり1419年の対馬征伐はその目標を達成するためでもあったと思われる。

以上の例でも当時、政治工作のために討伐対象としての海賊像を利用していたことは明白になったと思われるが、その他にいくつでも見出すことができる。このような例は日本の海賊が政治工作においていかに重要な存在であったか物語ってくれる。

結論として、以上で述べたように現代歴史学で言う「倭寇」とはグローバルな歴史現象であり、国史の枠組みから出る部分もある。

今回のシンポジウムでは日本学を中心とした集まりであるために出来るだけ日本側の出来事を説明しようと努めたが、私の研究テーマが日本学だけでなく、韓国、中国にまたがり、それらの総合である東アジア学がテーマであるために、大陸での出来事にも触れることとなった。なぜならそれ

らを抜きに国際的な現象であるこの海賊集団がもたらす歴史的影響やその意味を捉えることは不可能だと思ったからである。また、私の修士論文の中ではある程度の客観性を保つため「倭寇」の代わりに状況に合わせた、「日本海賊」、「水軍」、「海賊集団」等の用語を採用し使い分けている。

これからは対馬の宗氏と海賊との関係についてより深く調べ、海賊自体を地方経済の観点から研究していこうと思う。

註

¹ 田中健夫『倭寇一海の歴史』一九八二年、一二頁。

² 李領『倭寇と日麗関係史』一九九九年。

³ 佐藤進一『南北朝の動乱』二〇〇八年、三三一頁。

⁴ 『朝鮮王朝実録』戊子定宗八年三月甲辰朔、己未の条、戊戌太宗十八年二月壬午朔庚戌の条などに参照。

⁵ 『明史』卷九一、兵三、「海防」。

⁶ 『高麗史』卷第一一八 趙浚傳、卷第一三四辛禡傳二 四月の条。

⁷ この仮説を最初に取り上げたのは韓国の李領氏である。李領『倭寇と日麗関係史』参照。

⁸ 『朝鮮王朝実録』丙子太祖五年三月の条と己卯定宗元年秋七月朔戊寅の条。